

# I. 2017年度の総括

岐生研事務局長 佐藤真

## 1. 2017年度：岐生研の研究・組織活動について

### (1) 研究面

2017年度は、岐生研としての基調をつくることができずに出発しました。春の学習会において、全国（福島）の基調を学びました。だから、岐生研としての研究面の方針は持たずにやってきました。

岐生研としての学習会は、例年通り2回持ちました。ただ、例年と違う所は、「招聘した講師の先生にもレポートを出していただき、岐生研のレポートと合わせて2本のレポート分析を行った」ということです。もともとは、講座をお願いした佐藤晋也先生が「できれば自分のレポートを分析してほしい」と言われたことが始まりです。サークルに参加していた若い教員たちに「講座とレポート分析1本じゃなく、レポート分析2本というのは抵抗ある？」と尋ねてみると、「別々のレポートならいいんじゃない？」という返事。それなら、ということで、春の学習会を「レポート分析2本」でやってみました。

参加人数はそれほど伸びませんでした。参加者の感想からは充実した学習会になったことが感じられ、秋の学習会では、愛知の地多さんにこちらから「レポート分析」をお願いしました。初任者のSさんのレポートと合わせて2本の分析を行い、こちらもある学習会になりました。

Sさんのレポートは、地区セミナーでの全体学習会にも出されました。また、中学校分科会にはITさんのレポートも出されました。（ITさんは、昨年度の実践を福島大会にも出し、全国の仲間にその存在をアピールしました。）

春の学習会では初任3年目のNさんがレポートしました。Nさん、Sさん、ITさんと、今年度も若い教員がレポートを出してくれたわけですが、3人ともに共通しているのは「実践のしなやかさ」です。目の前につらい現実がある、大変な子どもたちがいる、そんな中でも、子どもに寄り添ったり、子どもから教えてもらったりした実践を貫いています。現在、初任者研修やら〇年目研修やらで、どんどん堅い指導が入ってきています。また、現場自体もゼロトレランスやそれに近い指導が行われ、若い教員も取り込まれています。そんな中でも、そのような指導に屈したり雰囲気飲み込まれたりしないで、自分らしい実践を貫いている若い教員を頼もしく思います。

また、Nレポート、Sレポートは、サークルの中で出来上がってきたという側面もあります。サークルの中で実践を語り、仲間からアドバイスをもらって実践を重ね、そしてレポートに仕上げていく、そんな過程を2017年度も積み上げることができました。このことは、それぞれが実践を高めていくのに、やはりサークルが必要であることを物語っています。逆に言えば、サークルで集まっていなければ、実践も独りよがりになったり苦しいままで終わってしまったりする可能性がある、ということも言えるわけです。

ベテランも黙っているわけではありません。INさんや私自身、別の機会にレポートを出してきました。特にINさんは、担任を離れた立場から、学年主任や社会科教員としての実践を、ずっと出し続けています。

若手がレポートを出すという方針を出してから、すでに数年経っていますが、若手がレポートを出すからと言って、ベテランがレポートしないということにはなりません。春や秋に出さなくても、どんどんサークルの中などでレポートを出していくことは、自分自身にとっても若い教員にとっても大切なことです。そのためにも、やはりサークルは欠かせません。

2017年度、それまでの岐生研と大きく変わったのが、「研究者の存在」です。新潟から朝日大学に足立さんが転勤され、それまでは実践家のみで実践を分析し合うことの多かったのですが、研究者の側面から日常的に分析されることが増えてきました。3月の理論学習会も、若い教員からのリクエストで、足立さんが授業を基にした講座を持たれました。そこに、可茂地区から初任者の参加もありました。